

矢崎 彈 著

近代日本文学より見たる

女性観

矢崎 彈 著

近代日本文学より見たる

女性観

日本出版株式會社刊

近代日本文學より見たる

女性觀

昭和二十三年七月廿五日印刷
昭和二十三年七月卅日發行

定價一〇〇圓

著者

矢崎 弾やまき だん

發行者

東京都世田谷區玉川田園調布一ノ三九
高坂 久喜

印刷者

東京都杉並區馬橋四丁目四四九番地
竹澤 眞三

印刷所

東京都杉並區馬橋四丁目四四九番地
中央印刷社

發賣元

東京都千代田區神田淡路町二丁目九
日本出版配給株式會社

東京都目黒區三谷町五三番地

發行所 日本出版株式會社

出協會員番號A一一四〇五一番
電話荏原(08)三八八五番
振替口座東京一三九・三・六四番

まえがき

この書は、明治、大正、昭和の三代にわたる代表的な名作小説にあらわれる女性を辿つて、近代日本における女性の愛と倫理が、いかなる變遷を^{かま}重ねてきたかを歴史的に^{あと}述づけようとしたものである。いわば、文學作品の女性を捉えて描いた女性思想史たらしめようとした。

文學が、現實の反映であるならば、小説に反映された女性群像を歴史的に捉え、それを系統づけることによつて、女性思想史を形作することも可能な筈である。私がそれを敢えてしたのは、女性發展の歴史的な具體性を掴み、こんにちの女性に對する、はげしい毀譽のあらしに答えたいと思つたからである。

敗北に終つた侵略主義の大太平洋戦争――。日本ファシスシードもは、國防國家の基礎的責任の擔い手と、欺きの言葉によつて、あらゆる嘆稱と激勵の聲をふりあげたのである。結局それは、欺瞞であつたとしても、女性も國防へ、生産へというファシストの聲によつて、それを機縁に一

應それまでの因襲の圍みを解いたことは事實である。しかし、かような進出が、當然もたらす女性の新しい性格が、一面で讃えられながら、他面から、主として男の保守的な感情の反撥を招きつゝあるという、矛盾に遭遇してはいないだろうか。そのみではない。一般の女性讃美の聲が、女性の長く背負わされた否定的な傳統への愛着をたち切れずに、女性の劃期的な前進が、遮られる虞れさえなくもないのである。

事實、この戦争に於ける總動員の一部としての女性であつたのだ。その動員された女性について、私には一つの體驗と、一つの聞き覚えがある。私は一部の女性、とくに運輸事務にたずさわつた者には好印象もあるけれども、わずか十七八歳で軍需工場を轉々し、官僚的というより謂ゆる傲慢、權眼で睨むという、無性格の存在をも認めねばならなかつた。また或る科學者からは、旋盤工としての女性の體質的マイナスを聞いた。これらは單に女性のみの弱點や缺點というのではないが、殘存せる過去の因襲と無性格が、戦争中かえつて増長されたという例證は尠くはない。しかし私は、その一方には男子をしのご仕事に應じ、また職場の解放に、過去の因襲の打破に努力した多數の女性のあつたことも信じたい。

終戦後の、こんにちの状態は、はじめての選舉權、新憲法の發布、男女共學の實現などの蔭に、多くの女性が殘存する資本主義によつて失業し、「夜の螢」として亂舞する傾きもある。これは勿

論、女性のみの罪惡とは言い切れぬとしても、これまでの日本女性の正しき生長が妨げられ、女性の特質の多くが失われたことは事實であらう。而してこれは、恐らく大震災後のモダンガールや、アメリカニズムを履きちがえた無性格が、清算されずにそのまゝ残存し、こんにちに及ぼす根抵となつたのではあるまいか。

今日の女性の性格と傳統、その發展と退歩に係わる一切の課題を解くには、少くとも、明治、大正の歴史的變化と生長の來歴に注目しなければならない。發展の歴史に係わりなく、歴史的現象を突然の疾風や、輕はずみな妄動として理解している限りは、今後の躍進的な女性の進出も神話的にならざるを得ない。一般には、明治、大正における女性の先驅的な運動や、思想の流れは、甚だ忌むべき、過失の歴史のように思われ勝ちである。女性の本質に悖り、民族の精神に背く破壊の憎惡すべき歴史として振返るものすらある。だが、果してそうであらうか。

男の本質ということとは、あまり際立つては言われない。しかし、女性の本質、女らしさと云うことは、今も永遠不滅の掟として、女性非難の端々に調子たかく聽かれる。女性の本質とは、果して如何様なものか、誰がその本質を作り、誰が、それを守るように傳統づけたのであらう。それは、

自然の運命であるという、暗黙の肯定のなかで、多くの曖昧な非難の聲は言葉を濁すであらう。

人間の原始時代からの歴史發展の特質は、先ず自然への抵抗、その征服によつて地球上の覇者となつたことである。そして、凡ゆる人間の努力は、その自然的な運命を切拓き、打開するところに、生長の曙を望み得たのである。ひとり女性のみ、ひたすら自然に順應し、屈從してきたのであらうか。

「永遠に女性なるもの、われらを引きて往かしむ。」(ゲエテ)という頌歌の側らに、「女なる故に」や、「弱きものよ、汝の名は女なり。」が、いつまでも附纏うという面白さは、何と解かれるべきであらう。今後の日本に世界史的發展を築こうとするには、それらの課題の不思議を、三代の女性にあらわれたモラルの變化、愛情、風俗などとの闘いを通じてこそ、初めて可能であり、革新的となり得るであらうことが考えられる。劃期的な歴史創造の、今日の女性にしても、かつて見ない有史以來の國民的愛情の共感に揺振ゆすぶられる時代の婦人も、過去を引繼ぎ、それを擴充する役割を持つて現れたのである。決して、無からの創造に憑かれたのではない。

戦争は、いかにも彼女らを躍進せしめたように見えても、それは一面で、こんにちの状態は、また過去に逆戻りし、或は曾てない放埒や無性格に停滯しないとも限らない。こんにちの民主革命は言葉のみで、まだ残存の資本主義は最後の身ぶるい激しく頑固である。そして彼らブルジョ

アジ―は、封建的なものをまだ引摺りながら、女性一般への神秘の幻想を支えている。これらの神秘の幻想、資本主義は、こんにちの女性が、よほど民主革命の方向に協同的になるのでなければ、過去の殘滓は、なおも執拗に女性の前進を阻んでゆくであらう。

明治、大正、昭和の小説にあらわれた女性は、以上のような切實な、女性こんにちの課題を解く鍵として、その思想や、觀念の風俗的、歴史的な發展の生々しい具體として、悲喜劇の舞臺に立ちあらわれる。何が悲喜劇の分類を行なつたのであろうか。彼女らの涙や悦びの聲は、こんにちの女性一般の發展にどう連なるものであるか。過去の嘆きは、その犠牲的な涙によつて、こんにちの歡喜となり得ているか。みずからの發展と、その新しい歴史的役割の嚴しい責任の自覺は、いきおい、みずからの性格や、環境への凝視を深めさせるであらう。そのような、自己革新の凝視を意義あらしめ、前進の榮養たらしめるには、みずからを支える傳統的性格の來歴を知らずにはいられない筈である。かような考察から、この小さい企ては始められた。それが、抱負を滿たすものであるか、否かは、讀者諸氏の明敏な批判を俟つのみである。

明治女性の歴史的な苦惱は、みずからが、自らの運命の支配者として生きるために生まれた。そのような歴史的理性は、いかような因襲と對立しなければならなかつたか。歴史の命じた明治女性の自覺は、果して女性の生長を、どのように促がすものであつたか。みずからを、自らで形

成し、建設しゆく歩みに、目覺めた黎明期の女性の苦惱は、また、自己形成を環境に依頼せず、自發的に成し遂げねばならぬ女性のこんにちへの、教訓の數々を含んでいる。

大正期は、總じて解放された女性の悲劇と、その頽廢の時代であつた。しかし、その頽廢の腐蝕のなかにも、昭和へと傳わる強靱な、女性の生活力と、聰明な知性の芽生えがあつたのである。歴史は、側面的には進まない。かならずや、頽廢のなかに次の發展を、發展のなかに恐るべき停滞の要素を交えつゝ發展する。そして、昭和時代へと、女性の傳統は、次第に前進的な光りを注ぎ入れてきた。

しかし不幸は我が國をファシスト體系に操り、國民を偽つた影響は、いかにも強く作用した。今後、言わば女性本來の革新というより、男女の差別なき、例えばソヴィエトに於ける女性の躍進に沿うべく、協同的努力を傾けることによつて、はじめて日本女性の上に光りをもたらしことが出来るであらう。

この書が、女性のこんにち、今後の前進に何らかの判斷力と榮養とを與え得るならば、幸い、これに過ぎるものはないであらう。

一九四六年七月

目次

まえがき……………一

序章 回顧(女性史の蘇生)……………三

第一章 傳統の悩みから解放へ(明治期)……………元

I 黎明期の苦惱

1 女權擴張と「蜃中樓」……………三

2 最後の叫びと「十三夜」……………六

3 二つのタイプと「不如歸」……………四

4 紅葉の女性と「金色夜叉」……………五

5 「婦系圖」と死の抗議……………五

6 美しい滅びと「瀧口入道」……………六

Ⅰ 自己形成への歩み

- 1 名譽の犠牲(「地獄の花」)……………七
- 2 「煤煙」と戀愛の畸形……………八
- 3 愛憎の分裂と「死の勝利」……………九
- 4 「虞美人草」の藤尾……………九
- 5 婦人の自立と福澤諭吉……………一〇
- 6 獨立への歩み「魔風戀風」……………一三
- 7 「人形の家」のノラ……………一三
- 8 むすび・「青鞥派」の運動……………一六

Ⅱ 明治女性の環境と輿論

- 1 北村透谷の戀愛觀……………一五
- 2 開化期の環境と良妻賢母主義……………一六
- 3 後期の自覺の性格……………一八

第二章 解放の悲劇から生活愛へ（大正期）……………一五

I 教養の悲劇

- 1 推移の過程……………一五
- 2 「律子と瑞枝」の決意……………一五
- 3 性格・環境・運命……………一六
- 4 美しい時代の浮標「眞珠夫人」……………一七
- 5 觀念の敗北……………一七

II 生活の慧智と悦び

- 1 「あらくれ」のお島の生活力……………一五
- 2 環境のちがいと慧智の方向……………一八
- 3 「つゆのあとさき」の自己喪失……………一八
- 4 「何が彼女をさうさせたか」……………一九
- 5 新しい自覺の基礎……………二〇

Ⅱ 解放された犠牲（大正期の省察）

- 1 因襲の冷笑と愛情の技術化……………二〇四
- 2 職業的擴大の結果は！……………二〇七

第三章 働く慧智と新世代の創造（昭和期）……………二三

Ⅰ 愛情の流浪から眞實へ

- 1 「寢園」の近代性格……………二二五
- 2 「眞實一路」の受難……………二三三
- 3 物慾の破滅と「美しき囚」……………二三五
- 4 「假裝人物」の流轉の悲劇……………二四四
- 5 「若い人」における二重心理……………二五五

Ⅱ 歴史の發展と愛情の擴充

- 1 女性の勤勞的役割の變化（「煉瓦女工」）……………二六九

2	「母系家族」の女性像	二八〇
3	愛情の計算と技術	二八八
4	躍進する女性像（「東京の女性」）	三〇〇
5	働く女性の自覺と男性の後退	三〇八

Ⅲ 現代女性の發展と歴史への愛

1	現代女性の特質について	三二四
2	未來への發展の課題	三二九

	あとがき（小説の女性と現實の女性について）	三三四
--	-----------------------	-----

序章

回

顧

——女性史の蘇生——

永遠に女性なるもの、
我等を引きて往かしむ。

「フアウスト」(ゲエテ)